

日本医師事務作業補助研究会主催 配置管理者セミナー in Tokyo ～医師事務作業補助者の活用と診療報酬改定～

平成 24 年 4 月 21 日、東京都の日本青年会館にて配置管理者セミナーを開催し、全国から 50 名あまりの方々に参加いただきました。今回、掲げたテーマは「医師事務作業補助者の活用と診療報酬改定」。平成 24 年度診療報酬改定の重点課題となっている病院勤務医の負担軽減は配置管理者が医師事務作業補助者をいかに活用できるかが鍵となります。医師事務作業補助体制の現状や課題、今後の役割について、特別講演やパネルディスカッションで実感していただける一日となりました。

初めに行われた特別講演 1 では、府中病院 院長の田中肇先生より「みなさんに期待すること～院長の立場から～」というテーマでご講演をいただきました。



(田中肇氏)

田中先生は思い描く組織を作るための要として、リーダーシップ、戦略、現場力の 3 つを挙げられました。現場力を高めるうえで重要なことは、仕事を任せ、チャレンジさせることや、一生懸命にやってくれる人、コツコツと仕事を回してくれる人をきちんと評価し、よい人は称える風土にすることであると述べられました。

また、医師事務作業補助者は必要とされることを自らやるのが大切であり、配置管理者はやりがいを部下に感じさせ、必要とされていると感じさせることが重要であると述べられました。

府中病院では、各部署間にできがちな溝を埋める事務職の役割が病院全体の組織力の強さに繋がっており、全国の病院と比較した職員意識調査では、トップの値を示しています。経営指標も上昇傾向であり、府中病院の現場力の強さを窺うことができました。

続いて、特別講演 1 では仲野メディカルオフィス代表の仲野豊先生より「24 年度診療報酬改定からみた医師事務作業補助の将来～中医協における 24 改定の途中議論を踏まえて～」というテーマでご講演をいただきました。



(仲野豊氏)

勤務医の負担軽減が診療報酬の重点課題となった要因を発表され、勤務医の負担軽減に一番効果があったのは医師事務作業補助体制であったと述べられました。また、従来は看護師が行っていた医師の事務サポートも医師事務作業補助者が担っており、看護ケアの充実にも寄与できていると報告されました。一方で、自分の病院に医師事務が配置されていることを知らない医師がいるという現状もあり、縁の下の力持ちではあるが、もっとアピールが必要。また、単なる事務作業補助者からのステップアップを行い、「事務作業補助」からの脱却を！といったお言葉をいただきました。

最後に「配置管理者からみた医師事務作業補助者活用の課題」をテーマにパネルディスカッションが行われました。

まず、東京医療保健大学講師の瀬戸僚馬先生より基調講演をいただきました。テーマは「外来業務における医師事務作業補助者の役割」です。瀬戸先生は薬剤師や看護師には人員配置の目安があるが、医師や事務職員には配置の目安がないので病院ごとのばらつきが大きくなりがちであると述べられ、事務職員が少ない病院では、コメディカルが事務的な業務を肩代わりする傾向が強くなると報告されました。外来業務を将来的に委譲したい医師は多いが、医師が医師事務作業補助者に外来業務をすぐに委譲したいと言わない訳は、医師事務作業補助者のスキルの問題であると指摘されました。また、医師事務作業補助者が外来のオーダー発行などを支援する際は安全が最大の課題であり、数か月先、一年先の目標を設定し、業務委譲してみてはと提言されました。



(瀬戸僚馬氏)



(南木由美氏)



(吉村博氏)



(佐藤秀次氏)



(高木哲夫氏)

その後、実務者、配置管理者、病院管理者のそれぞれの立場から、問題提起が行われました。

実務者からは手稲溪仁会病院 医療秘書課主任の南木由美さんより、実務者の育たない環境因子や理想の部署・上司、診療科密着型のメリット・デメリットが発表されました。また、実務者が不慮に不在になったときは、業務の代行が難しいと発言され、手稲溪仁会病院は緊急時補助マニュアルを作成し、補助し合えるチーム体制を構築されていると述べられました。

配置管理者からは潤和会記念病院の吉村博医事部長より発言をいただきました。医師事務作業補助者と医師の関係がこじれてしまった場合、医師が頼みごとをしなくなってしまう現状があり、潤和会記念病院では医師事務作業補助者の配置期間を最長1年とされていました。1年経過すると配置転換が行われます。医師事務作業補助者が急遽休んだ場合のために、2人体制の配置を行っているとして述べられました。

病院管理者からは金沢脳神経外科病院の佐藤秀次院長より発言をいただきました。医師とのパートナーシップを確立できる人の条件として、正確に効率よく業務を

行える人や医師が疲れている時は医師の気持ちを察し、明るく接することができる人を挙げられました。また、看護職の役割分担と協力関係も重要であり、看護師は病院の先住者であることから、医師事務作業補助者が業務に入ると抵抗することがあると述べられ、看護師の負担軽減にも繋がることを知ってもらわなければならないと指摘されました。



課題提起後、特別講演でご登壇いただいた田中先生や仲野先生、元・千葉県病院局経営管理課経営室副主幹の高木哲夫氏にもご登壇いただき、参加者のみなさんと忌憚のない意見交換を行うことができました。高木氏からは、医師の指示のもとにできる仕事はたくさんあると思うので、実務者が業務範囲を広げてこの研究会で発表し合い、職種として認知されていくことを

期待しますとのご意見をいただきました。

【参加者の感想】

「社会医療法人秀公会 あづま脳神経外科病院 事務部 今野 あさみ さん（福島県）」

先日はセミナーに参加させていただき、ありがとうございました。

パネリストの皆様の”生の声”を聞くことができ、心強い仲間を得た気持ちです。

当院では経験の浅い医師事務作業補助者が多く、今後の課題や展望も含めて、大変参考になる話題でした。外来診療補助、病棟回診補助、診断書・意見書の下書き業務の他、症例検討会の準備、1月から導入された電子カルテの代行入力など忙しい毎日ではありますが、先生方の「とても助かる」という言葉が私たちの原動力だと思っています。



また機会がありましたら、参加させていただきたいと思います。

【日本医師事務作業補助研究会より】

本会は多数の方にご参加いただきありがとうございました。また、貴重な発表を提供していただいた講演者の方に厚くお礼申し上げます。

平成 24 年 6 月 30 日（土）には[第 2 回日本医師事務作業補助研究会例会](#)を開催いたします。多数の方々のご参加をお待ちしています。

（文責）日本医師事務作業補助研究会 幹事 藤原 典子
（東大宮総合病院 医療クラーク室主任）